

デジタル化に向けた次の一手(第2回)

時間とゆとりをもたらす業務改善～介護業

2023.09.22

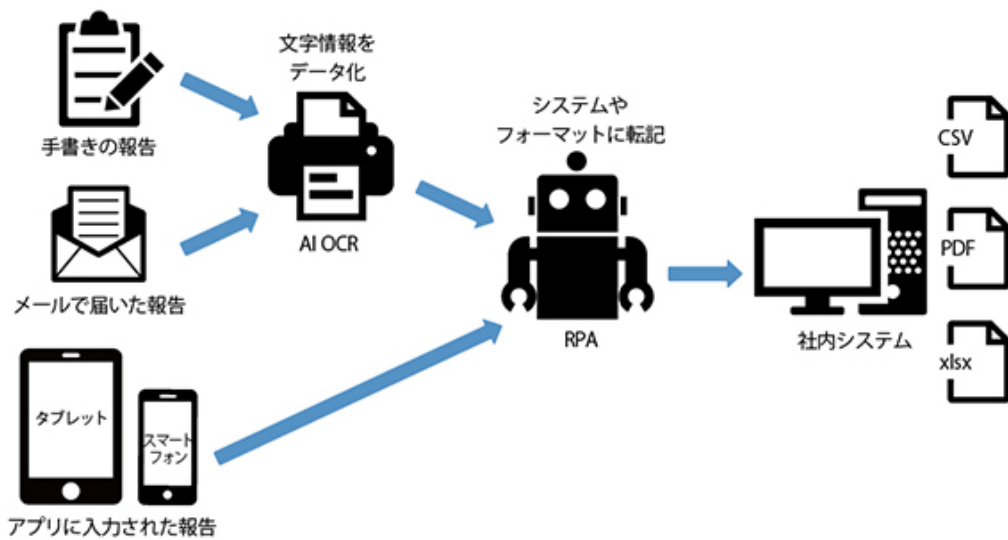


介護人材の不足が深刻化する中、従業員の負荷軽減や生産性向上につなげるべく、RPA(Robotic Process Automation)を活用する事業者が増えている。RPAはコピー&ペーストやデータの転記など、繰り返される定型業務の効率化に適している。介護の現場では利用者の日々の様子を記録することに加え、介護日報の登録や介護保険請求など多くの定型業務が発生する。これらの業務をデジタル化し、RPAを導入することで正確かつスピーディーに処理することが可能となるだろう。では、実際の現場ではどのようにRPAが活用されているのか、いくつかの事例を紹介する。

デジタル活用が進む介護現場ではヘルパーの負担を軽減する工夫を

RPA導入においてまず確認すべきなのは、介護の現場でタブレットやスマートフォンを使った記録がなされているかどうかだ。日々の記録が電子化されていれば、RPAでそれらのデータを取り込み、指定した作業を実行することができる。紙文書については、RPAにデータを取り込むためにOCR(光学的文字認識)で文字を読み取ってデータ化する作業が発生するケースが多い。

老人ホームやデイサービスを展開するA社の場合、食事の量や排便回数といった介護記録の入力・管理にはクラウドソフトを利用している。クラウド上には数多くの介護記録を入力できるものの、詳細な記録を残そうとするために入力項目数が多く、入力完了までに時間がかかっていた。データ入力は現場のヘルパーにとって大きな負担となり、介護業務に集中できない状況が生じていた。そこでRPAを使い、各入力項目に初期値をテンプレート化して入力しておくようにした。変更が必要な項目のみヘルパーが入力するようにしたことで、現場の負担が軽減され、最小限の作業で介護記録が残せるようになった。



日々の記録をデジタル化することで、業務全体の自動化にもつながる

バックオフィス業務の自動化にもRPAの導入が有効… 続きを読む